三

天守閣で太鼓が鳴らされ、白鶴城に緊張が走った。

大書院に御直目付の中居半蔵が入ったとき、出席者は会議を主宰した国家老の宍戸文六を省いて、御番組頭の山尻三郎助、御手廻り組宍戸秀晃、御用人山鹿岳春、記録所役出水竹九朗、そして右筆榊原千代蔵が顔を揃えていた。

秀晃が呆けた顔で中居半蔵になにか言いかけたが、じろりと半蔵睨まれ、黙りこんだ。

城の内外にも大書院の周りにも殺気が漂った。

宍戸派の家臣たちが大書院を固めたのだ。

反宍戸派、あるいは文六の専横を快く思わぬ藩士たちもいたが、なにしろその中心になるべき人物を欠いていた。それぞれの者たちが各々の部署で密かに成り行きを見ながら、心を痛めていた。

また大手門をはじめ、城中に通じる門には宍戸派の者たちがやりを構え、鉄砲隊まで配備して、、城の外から入り込む一切の人物を阻止せんとしていた。むろん由布院からの帰途に行方を晦まし、坂崎磐音の手に落ちた西国屋次太夫の入城を拒む防衛線だ。

「国家老宍戸文六様、出座にございます」

隣室から声がかかり、宍戸文六が太った体を緩慢そうに揺すって大書院に入室した。

その隣室には、美濃部大監物と二人の手下の控える姿があった。

文六が上座に席を占め、一座をぎょろりとした大目玉で見回した。頬の肉が垂れて顎の上で重なり合い、文六容貌をさらに怪偉にしていた。

視線が中居半蔵のところで止まった。

「呼ばれもせぬ者が出席しておるが」

「それがしのことでございますか、ご家老」

「おお、そのほうに決まっておるわ」

「御直目付の職務はご家老をはじめ重役方の監督糾弾にござれば、出席は至極当然にございます」

半蔵は平然と言い切った。

「とは申せ、そなたは江戸屋敷の御直目付である、国表とは関わりがない。そのこと忘れるな」

「ご家老、奉公に国許も江戸屋敷もござらぬ。かような大事な会議に、国許にありながら欠席したとあっては、後々、殿にお叱りを受けまする」

「半蔵、出席は差し許す。されど、口出しはならぬ」

「それがし、任務のほかに口を挟む気はありませぬ」

文六がさらに言いかけたが思いとどまり、

「中老坂崎正睦をこれへ」

と命じた。

隣室から無腰の正睦が入室して一座に頭を下げ、示された座についた。

会釈を返したのは、右筆の榊原千代蔵と中居半蔵二人だけだ。

「ただいまより中老坂崎正睦にかけられし不正の数々を吟味いたす。さよう心得よ」

「あいや、しばらく。それがし、ご家老が申される不正などに関わった覚え一切これなく候」

「黙れ黙れ！正睦、そなたに訊いておるのではないわ」

「いえ、申し上げます。そもそも藩主実高様江戸参府の折りに、かかる大事を国家老の宍戸文六様一人の考えで主宰なさると自体疑義がござろう」

「正睦、黙って聞いておるか、それとも猿轡、縄目にて捌きの座に転がされるか」

文六の大声はすでに高ぶって異常を示していた。

「ようござる。異議がござればその都度反論いたそう」

文六は正睦の言葉を聞かなかった顔で座り直した。

「中老坂崎正睦にかけられし、第一の不正借り入れの一件から取り調べを始める。訴えによれば坂崎正睦は大阪、江戸にて、藩名を借りて不正に大金を借り受けた一事あり。その借り受けし金子はなんと一万六千五百両に及びしものと判明した」

一座がどよめいた。

「なんと、そのような大金を、坂崎正睦どのはなんのために借りられたのか」

御番組頭の山尻三郎助が叫んだ。

「訴えによれば、坂崎正睦、豊後関前の藩財政改革と称して、これまでの長年の商取引を反故にいたし、藩物産所を設けて、領内で取れる物産の数々を上方、江戸に運んで取引をなしたり。その目的は藩財政の改善を殿がご了承なされたという言葉を金科玉条のごとく利して、私欲を図ることに専念しこと、調べによって明白なり。その思惑商売が破綻をきたして、多額の損を出したり。ゆえに上方、江戸の両替商より一万六千五百両もの借財をなしたりとある」

「な、なんと」

御用人山鹿岳春が愕然の色を見せた。さらに記録所役の出水竹九朗が、

「ご家老、証拠がござろうな」

と訊いた。

「むろんあっての会議召集じゃ」

文六が満足そうな顔で一座を見回した。

「指し示していただけるか」

文六が頷くと、宍戸家の用人が用意していた書類を、次の間から小姓の一人が文六のもとに運んできた。

宍戸文六は書類を手にしたが開けようともせず、膝に置いたまま言い出した。

「まずは不正借り受けの手口じゃが、坂崎正睦は長年の国許奉公ゆえ上方、江戸の両替商との面識はない。ゆえに関前城下の廻船問屋西国屋次太夫に紹介の労を頼みしという」

「あいや、しばらく」

と声をかけたのは右筆の榊原千代蔵であった。

「西国屋次太夫は、近頃城下を離れているというではございませぬか」

「ご老人、そう先走られてもかなわぬ」

「これは失礼をばいたした」

「次太夫はそれがしに、坂崎正睦の強い要望で上方、江戸の両替商との橋渡しをいたしたが、まさか実高様にもわれらにも断りもなく暴走するとは夢想だにしなかったと告白しおったわ。藩の名で借り受けられた大金が坂崎正睦個人の考えでなされたと知り、それがしに仲介の経緯を申し述べたのち、心労にて倒れ、関前藩を離れて療養に当たっておるのじゃ」

文六がぬけぬけと言った。

「父上、坂崎様は一万六千五百両を私欲のために借りられたのでございますな」

秀晃がもっそりと訊いた。

「いかにもさよう」

と答えた文六はしばし瞑目した。

「出席の方々には、なぜ坂崎がそのような強引な手をと疑われる御仁もござろう、すでに申し述べたように、藩物産所の企てにて多額な損失を出したことがひとつの理由にござる。第二には、昨年の夏の事件と関わりを持つ」

「昨夏の事件とは、河出慎之輔が錯乱し、小林琴平がここにおられる山尻様の次男を惨殺された一件にござるか」

御用人の山鹿が訊いた。

「さよう、あの事件である。あの事件において河出と小林両家が廃絶になった。当事者たる慎之輔と琴平の朋友、坂崎磐音は事件のあと、藩のお許しも得ずに関前城下を抜けおった。噂によれば、江戸にて貧乏暮らしを続けておるという。おそらく正睦は、浪々の身に落ちた嫡男不憫さに金を残したかったのであろう」

文六がぬけぬけと言い切ったとき、高笑いが響いた。

「無礼者！半蔵、なにがおかしゅうてそのような馬鹿笑いをいたしたか」

「ご家老、盗人猛々しいとはまさにこのことにございますぞ」

「おのれ！なんと申したか」

隣室から美濃部大監物の手下二人が膝行してきた。

半蔵がじろりと見て、吐き捨て、

「無礼かどうか、各々方、それがしの申すことを訊いて判断していただこう」

「坂崎正睦様が借財なされたという一万六千五百両の借り受け先、いずれか教えていただきたい」

「されそれは……」

「ご家老、西国屋次太夫から詳しく経緯を聞かれたのであれば、当然、借り受け先もお聞きになったのでございましょうな。お忘れとあらば、ほれ、膝の上の書類に書いてございませぬか」

「余計な口出しをしおって」

「ご家老、それがしが申し上げましょうか」

「さかしら顔に口を挟むでない」

文六が隣室の美濃部を見た。

すでに大書院に入っていた二人の手下が、刀の柄に手をかけようとした。

その矢先、御直目付の大喝が飛んだ。

「藩士でもなき者がいかなる仔細あって、豊後関前藩の重大なる会議の席におるのじゃ。下がりおろう！」

美濃部が文六の顔を窺った。

「ご家老、中居半蔵が申すこと一理あり。この者たちは何者にござるな」

右筆の榊原が割って入った。

「ご老人、この者たちはそれがしの相談役でな。異論があると申されるなら、下げさせよう」

文六の目配せに二人が隣室に姿を消した。

「榊原様、よう申された。某がこれから話すことにも耳を傾けてくだされよ」

と断った半蔵は、

「わが豊後関前藩には、これまで多年に亘って溜まりに溜まった借財が、大阪の蔵元に銀二千六百貫（およそ四万二千両）と、関前藩実収の三年分ほどがござる。それは皆様もご存じのとおりです。そのほか、二年ほど前に新たな借財がなされてござる。その借受人の名は、ここにおられる坂崎様ではござらん。江戸家老篠原三左様にござる」

一座がどよめいた。

「お静かに。各々方もご承知のとおり、ここ数年、篠原様のお体の具合悪く、寝たり起きたりの暮らしゆえ、先頃江戸藩邸次席家老として、文六様の縁戚、宍戸有朝様が着任されたほどにござる。そのような篠原様が大阪の両替商天王寺屋五兵衛、近江屋彦四郎、江戸の藤屋丹右衛門ら三軒から一万六千五百両もの借財をなした上に、その金で飛騨の天領から切り出した材木を買い付けて江戸に送り、蓄財して投機をなすという荒業ができましょうか、考えてもみてくだされ」

「ま、まことか」

榊原が訊いた。

中居半蔵は用意した包を解くと、磐音が今津屋の老分番頭の由蔵から貰った書き付けを出して一座に指し示した。

「ここに江戸京橋の両替商藤屋の借用書の写しと、取引の経緯を証言した書き付けがござる。それによれば、確かに豊後関前藩の借り受け人の名は篠原様にござる。しかし藤屋の老分番頭は、篠原様の顔は一度も見たこともなく、実際に立ち会われたのは、宍戸文六様の昵懇の御留守居役原伊右衛門様であったと証言しております。これは一体どうしたことか」

半蔵が文六をはたと睨んだ。

「遠く関前におられる中老の坂崎様が、上方、江戸の両替商からいかにして一万六千五百両もの借金ができようか。各々方、いかが思われるな」

半蔵は書き付けを右筆の榊原老人に回した。

「中居半蔵、そのような弁明書などたれでも作れるわ」

「ご家老、西国屋の弁明書と一緒にせんでくだされ」

と吐き捨てた半蔵が、話はまだ半分も終わっておらぬと言うと、

「江戸に蓄財されていた材木がどうなったか、各々方は知りたくはござらぬか」

「知りとうござる。昨年二月には江戸を焼き尽くす大火があったはず、値上がりして一万六千五百両が大金に化けたか」

榊原がいったん書き付けに視線を落としかけていたが、顔をあげて訊いた。

「榊原様、商いは濡れ手に会わとはいき申さぬ。目黒行人坂の大火に蓄財中の材木も消失したのでござるよ」

「な、なんと」

「各々方、そのとおりにござる。藩に新たな一万六千五百両の借金と利息が残った。その利息すら三軒の両替商にはらってはおらぬ。両替商の間では豊後関前藩の名は地に落ちておるそうな。そうでございましたな、ご家老」

「中居、それがしが知るわけもないではないか」

「原様は、腸なしの伊右衛門と、関前にあっては囁かれていた人物にござる。それを江戸の公儀人に推挙なされたは、ご家老ではありませぬか。腸なしどのが一人で一万六千五百両もの借金をできるものか。そなた、ご家老の指図なくしてはな……」

「言うに事欠いて無礼千万である！」

宍戸文六が怒鳴った。

「先ほどご家老は、坂崎様が不正な借金をなされた理由のひとつに昨夏の事件が関わっていると申されましたな。実に都合よく解釈なされたものと、それがしも少々呆れており申す。事実は、坂崎磐音ら江戸に遊学しておった若い藩士三人が関前に戻って来て、藩政改革に手をつけることを恐れたご家老が策を弄し、坂崎磐音、河出慎之輔、小林琴平たちを同士討ちさせた、それが真相にござる。山尻様、そなたの次男禎頼どのもこの企ての片棒を担がされて、あげく小林琴平に殺されたのでございますぞ」

半蔵の言葉は力強く大書院に響き渡った。

「な、なんと。真実か、ご家老……」

山尻三郎助が宍戸文六を見た。

「知らぬ知らぬ。なんの証拠があって、そのような言いがかりをつけおるか」

「西国屋次太夫と番頭の清蔵が、すでに一切をば自白しておりますぞ」

「ならばその証拠を見せよ、中居半蔵」

「…………」

「できるか、半蔵」

「ご家老、証拠とはいかなるものにございますかな」

「西国屋次太夫がすべての企ての背後にわしがいたと自白したのであれば、次太夫をこの場に連れてまいれ。次太夫がこの場にてさよう申すのなら得心もしよう。のう、各々方」

「さようでござる」

と倅の秀晃が賛意を示した。

「それがしが持参いたした書き付けでは信用できぬと申されるか」

「当たり前じゃ」

「…………」

「答えられまい、半蔵」

文六が、

「こやつを、中居半蔵を、大書院からひったてい！」

と大声で命じた。

大書院の廊下に、宍戸派の藩士たちが抜き身の槍や刀を下げて現れた。

その瞬間、同時に遠くで騒ぎが起こっていた。

物見櫓から西国屋次太夫と番頭の清蔵を引っ立てた磐音たちが、大書院に接近しようとしていた。

「なんの騒ぎか」

文六の倅の秀晃が廊下の面々に質した。

廊下の端で、

わあっ！

という叫びが上がった。

「坂崎磐音がでおったぞ！」

宍戸派の一人が叫んだ。

美濃部大監物の手下の一人、安楽源蔵が大書院を突っ切り、廊下に出た。すると威圧された家臣たちがぞろぞろと後退してきた。

「どかれよ！」

安楽の命に家臣たちが庭に飛び降りて、その場を空けた。すると磐音を先頭に、別府伝の丈らが西国屋次太夫と清蔵を引っ立ててきた。

「おのれ！」

安楽源蔵が刀を抜いて、厳しい顔付きの磐音の前に立ち塞がった。

「そなたの顔には見覚えがないな」

磐音が言った。

「そやつはご家老の用心棒一人、安楽とかいう獣にございます」

伝の丈が言った。

「ここは豊後関前藩の城中、用心棒がなにゆえここにおる。早々に立ち去るがよい！」

「おまえこそ、もはや関前には関わりなき男、何用あってこの場に罷り出た」

「なあに、集まりに肴を持参したまででござる」

「おのれ！愚弄しおって」

安楽源蔵が抜き身を水平に構え、

「ええいっ！」

と叫ぶと、果敢にも切っ先を磐音の喉首に合わせて突進してきた。

間合い五間と見ながら磐音も出た。後方に控える別府伝の丈らの身を案じたからだ。

迷いもなく廊下を走りながら、備前包平二尺七寸を抜き上げた。

突きの姿勢で突進してきた安楽の切っ先を包平で弾いた。

安楽の弾かれた剣先が障子に流れて桟を破った。

磐音の包平は安楽の正面に止まっていた。

次の瞬間、包平が静から動に変じて安楽の眉間に吸い込まれるように叩きこまれた。俊敏極まりない太刀風である。

「ぐええっ！」

なんとも空恐ろしい絶叫を上げた後、それでも廊下に立ち竦んでいた安楽が、ぐらぐらと体を揺らして庭先に転がり落ち、仰向けに倒れた。

眉間を真っ向唐竹割りに割られた安楽の血が庭に広がっていった。

凄まじい斬撃にだれも声を発しない。

「ごめんくだされ」

血塗れの包平を背に回した磐音は大書院の敷居に立った。

「暇乞いしたそのほうがなぜ、城中に入り込んできおった！」

宍戸文六が叫んだ。

「ご家老、宴の席としては酒肴がたりませぬ。持参しましたのでご賞翫あれ」

磐音の言葉に伝の丈が、西国屋次太夫と清蔵の二人を大書院に突き転がした。

「西国屋！」

「ご家老！」

文六と次太夫が言い合い、見合った。

中居半蔵が叫ぶと次太夫に書き付けを指し示し、

「昨年の事件の背後に国家老の宍戸文六どのがおられ、坂崎磐音らを互いに離反させ、自滅させるように仕組んだことに相違ないな」

「……そ、相違ございません」

「西国屋、なんということを申すか」

「豊後関前藩の新たな借財一万六千五百両は、材木相場に加担して一儲け企むために、天王寺屋、近江屋、藤屋ら三軒の両替商から金を借りた。それは家老宍戸文六の発案で、そなたが両替商を仲介したのも相違ないな」

「相違ございませぬ」

「次太夫、狂ったか」

「ご家老、私は商人にございます。勝ち戦の船に乗り換えさせていただきます」

次太夫は顔を歪めて叫んだ。

「なんということをぬかしおるか。勝ち戦か負け戦か、未だ勝負はついておらぬわ」

文六がそう言うと、

「者ども、出会え出会え！」

と叫んだ。

大書院のあちらこちらに配置されていた宍戸派の家臣たちが槍や刀を手に姿を見せた。

だが、磐音の気迫に圧されて、尻込みした。

なにしろ昨夏の御番の辻の決闘は伝説となって家臣たちの間に語り継がれていた。その人物が血刀を手に立ち塞がっているのだ。

「静まれ！」

磐音の大声が大書院に響いた。そうしておいて、主のいない上段の間に上がった。

「おのれ、狂ったか」

文六の言葉に美濃部大監物の手下の一人、三谷鬼角が抜き身を翳して磐音に殺到してきた。

「下がりおろう！」

と叫びざま包平は閃くと、飛び上がってきた三谷の喉笛を切っ先が襲った。

三谷は怒りを込めた包平に喉を切り裂かれて隣部屋に転がり落ちた。

再び磐音が叫んだ。

「静まれ、上意である！」

思わぬ言葉に一座がどよめいた。

磐音は畳の上に抜き身の包平を突き立てると、懐から、江戸の下屋敷で藩主の福坂実高が関前下向に際して下しおかれた書状を出した。

磐音は開いた封を懐に差し入れ、上意の書面を読み上げた。

「上意、豊後関前藩家臣に申し付く。余の書状を持参せし坂崎磐音、関前藩に福坂実高の特使として差し遣わす者なり。先に下向せし御直目付中居半蔵ともども、関前城中に多年に亘りて不正を行いし者どもの査察糾弾の特権を与えるものなり。安永二年五月二十七日、豊後関前藩藩主福坂豊後守実高」

磐音は書面の表を一座に向けた。

「ははあっ！」

と坂崎正睦が倅に、いや藩主の代理たる磐音に平伏した。

一座がそれに倣った。

頑迷にも頭を下げることを拒んだのは宍戸文六ただ一人だ。

「宍戸文六、そなた、藩主福坂実高様のお心にも従えぬか！」

中居半蔵の大喝が飛んだ。

ゆっくりと、ゆっくりと文六の老体がkずれて両手が畳につき、肩が落ちた。

「国家老宍戸文六に申しつく。豊後関前藩の藩政を専断せし横暴、狂気の沙汰なり、後日改めて吟味の場を申しつくる。本日は倅秀晃ともども早々に下がって、屋敷にて謹慎いたせ」

中居半蔵の激しい言葉に文六がよろよろと立ち上がった。

「別府伝の丈、そのほうら、信頼のおける家臣を糾合して宍戸屋敷まで送り届け、謹慎を見届けよ」

反宍戸派の藩士たちに静かなどよめきが湧き起こり、中居半蔵の命に、

「中居様、それがしもその役につけてくだされ」

「御直目付、それがしも警護の役をお願い致す」

と次々に申し出てきた。

関前城中の宍戸派と反宍戸派の形勢は完全に逆転していた。

「ご家老の一行が謀反の意思を示さば、その場にて斬り棄ててかまわぬ。殿の御意思である」

半蔵の言葉を聞きながら、磐音は宍戸文六手飼いの美濃部大監物の姿を探した。

だが、いつの間にか美濃部は消えていた。